第１章　「もの」と「こと」の意味論②

前おやさと研究所長
井上　昭夫　*Akio Inoue*

第２節「つとめ」と「創世記」―「ようし、ようし」について

天理教原典における「こと」という最初の音声言語は、

あしきをはろうてたすけたまへ　てんりおうのみこと

の神名である天理王命の「命」（みこと）の「こと」に「あらわれている」ことは前号で述べた。ちなみに『字訓』（白川静）によれば、「命」（みこと）の語源は「御言」であり、尊貴な人の仰せ言をいうと定義される。「み」は接頭語。その人を尊んでいうとき、命・尊をその名の下にそえていうことがあり、その場合は「御事」の意で婉曲語法。「みこと」を単独に使うときは御言、すなわち命の意である。言と事とは同源の語であるとあり、関連する万葉集・記紀を数首あげている。「命はもと神の宣託をいう。字は令と口とに従う」、口は祝詞を収める器の形で神託を受ける意で、天や神霊の命ずるところをいうと説明され、「みことのり」（勅・詔）も「御言宣り」の意であること、「みこともち」（宰・司）のことも「御言」で地方の統治をおこなう官吏であるとの解説を２頁にわたって述べている。

この「つとめ」の第一節の上の句は、慶応２年、小泉不動院の山伏が白刃を抜いて中山家のお屋敷に暴れ込んできて、乱暴狼藉を振る舞い、提灯や太鼓を切り裂いて帰った後、教祖が「あしきはらいたすけたまへ　てんりおうのみこと」と教えられ、同時にその手振りも教えられた最初の「つとめ」の地歌のもととなった。それまでの信者は、（なむ天理王命〈てんりおうのみ「こと」〉）と、くりかえしくりかえし拍子木を叩いて、神名を唱えて「つとめ」をしていたと伝えられる。したがって、天理教においては、教祖に降臨した神の名称自体に、やまとことばの「こと」が隠しもつ重要な意味があるのではないかということに着目させられたのである。

つとめの第二節と「よろづよ」八首のおわりに唱える「ようし、ようし」という発声音は表記化されていない。表音文字として書かれなくても「つとめ」においては「よしよし」ということばが「ようし、ようし」と延音され合掌をともない祈りことばとして発せられる。その意味について問うた一信者への教祖の回答は簡潔明瞭で「ようし、ようしに、悪い事はないやろ」というものであった。同義語反復のように思われる教祖の返答は重大な意味を含んでいると考えるのであるが、あまたある『みかぐらうた』解説本では、たんなる囃子ことば類と解釈されているのか、思想的・裏守護的な解釈は一切みられない。踊り手が「ようし、ようし」と発声する時には、どのような感覚がイメージされているのだろうか。なお「なむてんりおうのみこと」をというつとめの重要な神名の合掌の祈りことばが十二下り各下りの終わりに表記されてないという謎については、拙著『みかぐらうた』（日本地域社会研究所、2012年）にくわしく論じておいたのでここでは割愛する。ちなみに「なむ」は帰命・帰依をさす梵語ナマスの意訳で、南無はその音訳である。まず「ようし、ようし」と題された逸話篇109を引用する。

> ある時、飯降よしゑ（註、後の永尾よしゑ）が、「ちよとはなし、と、よろづよの終りに、何んで、ようし、ようしと言うのですか。」と、伺うと、教祖は、
>
> 「ちよとはなし、と、よろづよの仕舞に、ようし、ようしと言うが、これは、どうでも言わなならん。ようし、ようしに、悪い事はないやろ。」
>
> と、お聞かせ下された。

「ちよとはなし」は明治３年に教祖が教えられたつとめの第二節で、

一寸話　神の言ふこと聞いてくれ
悪しきのことは言はんでな
この世の地と天とをかたどりて
夫婦を拵へきたるでな
これハこの世の始めだし

と教えられる。「ようし」は「悪しき」に対応する「良し」の強調的表現であろう。よしえの疑問は二節の地歌のおわりに「ようし、ようし」が表記されてないにもかかわらず、そのことばを唱えるのは何故かという単純なものであったのであろう。それに対する教祖の返答から、わたくしが即座に思い出したのは『旧約聖書』の「創世記」であった。天理教とキリスト教の立教の時代は2000年近くもはなれ、言語・文化もいうまでもなくいちじるしくことなっている。キリスト教の人間創造説話が世界創造の順序と内実において基本的に相異しているのは「元の理」と比してあきらかであるが、共通する諸点もある。類似に通底するキーワードは悪と地天と夫婦、そして「創世記」がかたる天地創造の６日間に起こった短い文章のおわりに、かならず出てくる創造神の「よし」とされた神のよろこびのことばである。

「創世記」の天地の創造は、「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。〈光あれ〉こうして光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。」新共同訳英文ではこの「よし」を「God was pleased with what he saw」、一方『Holy　Bible　Red Letter Edition』では、「God saw that it was good」と統一訳され、第１日目の光の創造にはじまり、つづいて各日に天、海と陸地、天体、魚鳥類、動物と人間の順序で、６日間の世界創造が神の働きで各日に「良しとされた」ということばで完成する。３日目の海と陸地の創造に際しては２度「良しとされた」と記されている。

日本聖書協会『聖書』（新共同訳）では、ヨハネ書の有名な冒頭の一節を、

初めに言葉があった。
言葉は神と共にあった。

と翻訳している。しかし、東北大震災で被災したふるさとの岩手県気仙地方で医師をつとめ、独学で古代ギリシャ語原典を勉強しケセン語訳聖書を完成した山浦玄嗣は、『イエスの言葉―ケセン語訳』（『文春新書』）において次のように訳出する。

初めにあったのは
神さまの思いだった。
思いは神さまの胸にあった。

最初にあったのは「言葉」ではなく、「神さまの思い」だったという古代ギリシャ語からの解釈である。単なる「言葉」であれば、出現の順序が「元の理」と逆転している。「初めにあったのは神様の思いだった」のは「元の理」に限りなくちかい翻訳である。ここでは創世記の冒頭と「元の理」の簡単な比較だけにとどめておくが、山浦のケセン語訳は、新共同訳より日本語としてわかりやすく「元の理」に符合している要素がみられる。「おふでさき」第一号１番の「万代の世界一列見はらせど　旨（胸）の分かりた者はない」や、第六号81番の「月日より真実思い付いたるわ　何と世界を始めかけたら」が思い出される。ギリシャ語の「言葉」と訳されたロゴスには数多くの意味があり、その意味をたどっていくと最後の17番目に「思考」、つまり「思い考える」がでてきて、山浦はこのロゴスのあらたな意味の発見が聖書改訳の原点となったと思わせるよろこびを語っている。